

太田道灌 蓑を借りて 因に題す

作者不詳

孤鞍雨を衝いて 茅茨も叩く

少女為に遺る花一枝

少女言わず 花語らず

英雄の心緒乱れて 糸の如し

【作者】愛敬四山(あいけい しぎん)(一八〇二〜一八五二年) 熊本の人。通称四郎次と呼び、名は武元(たけもと)、

号は四山、白雲楼、華奴(かど)、蕉日(しょうじつ)という。時習館訓導となり詩を好くし嘉永五年十二月没す。

年五十一。著書に「鶏肋(けいろく)集」「白雲楼集」等の詩集がある。

【語釈】*太田道灌…室町時代中期の武将・歌人 築城・軍略にすぐれ 江戸城の築城者として名高い

*孤 鞍…一つの鞍 転じて 従者も連れずひとりで馬に乗ってゆく人 *茅 茨…かやぶきの家

*花 一枝…八重の山吹の花の一枝 *心 緒…心の動き 心中のおもい

【通釈】太田道灌がある日、独りで武蔵野の狩に出て俄雨に逢い、とある一軒のかやぶきの家を訪ねて蓑を借りることを頼んだ。すると、一人の少女が出てきて、蓑ではなく、山吹の花一枝を差し出した。これは、「七重八重花は咲けども 山吹の みの一つだになきぞかなしき」という古歌に「とよせて、「蓑が一つもない」と断ったのである。しかし、道灌はこの古歌を知らず、また、少女も何も言わな

いので、英雄の道灌もこの謎を解くことができず、心中何が何やらわからなかった。城に帰って臣下よりこの歌を教えられて、奥ゆかしい少女の気持ちを知るとともに、自分の無学を恥じた。そして、その後、大いに和歌を学び、後には立派な歌人となった。